



アートによる新生ふくしま交流事業

アートで広げる 子どもの未来 プロジェクト

2022

記 録 集

アートによる新生ふくしま交流事業

芸術活動を通して被災地の地域コミュニティの支援や心の復興を図る「アートで広げるみんなの元気プロジェクト」及び、子ども達に学校では体験できない創作の機会を提供する「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」を実施しています。

アートで広げる 子どもの未来プロジェクト 2022

福島未来を担う子どもたちに、将来「新生ふくしま」を推進する人材として活躍してもらうため、多彩なアートプログラムを体験できるワークショップを実施することで心豊かな成長を支援するプロジェクトです。

今年度もアーティストを講師に招き、県内各地の学校・施設等で作品づくりのワークショップを開催しました。ワークショップでは、アーティストと子どもたちが交流しながら創作活動を楽しみました。

CONTENTS

P2

1

私の大切なふくしまの風景

講師 齋 正機

P6

2

福島 / 会津の色、わたしの色
—私だけの「色手紙」をつくろう—

講師 手塚千尋

P10

3

アート&サイエンス
「人体」をテーマにした STEAM から

講師 渡邊晃一

P14

4

簡単・たのしいトリック写真

講師 高橋延昌

P18

みんなのアート作品展

(アートで広げるみんなの元気プロジェクト共同開催)

P20

「未来プロジェクト」振り返りと気づき

私の大切なふくしまの風景

何気ないけれど大切なふくしまの風景。

じっくり感じ、観察し、円形の枠を使ってアクリル絵の具で描きました。

絵と言葉を通して、自分の大切な福島風景を探求しました。

2022.11.26 sat

福島市

福島県立福島東高等学校

講師 齋 正機

1966年、福島県福島市生まれ。1992年東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業、1994年同大学院修了。喜多方市美術館で開催された「1998公募：ふるさとの風景展」において最優秀賞を受賞。その後も数々の絵画展で受賞を重ね、2003年に洋画界の登竜門とされる昭和会賞を日本画家として初めて受賞。2011年から毎年、東邦銀行のカレンダーに作品が採用されるなど、活躍の幅を広げている。



話を する 齋先生に みんな夢中 空気感を 描きたい 生徒に セザンヌの

この日のために齋先生が用意したのは、約60cmの正方形に直径50cmの円を描いた真っ白なキャンバス。完成した作品を展示する際、壁ではなく天井に並べていくと、お寺の本堂などで見られる格天井画のようにもなるという壮大なプランを内包する企画です。

当日、齋先生は生徒たちが考えた「私の大切なふくしまの風景」を、どうすれば描ききれるか、生徒たちの話を聞くことから始めました。春の花見山を撮った写真に愛犬を組み合わせたいという生徒には、「風景は、美しいけれど止まっている。でも犬を組み合わせることで動きが出てくる。美しさと活気が出るような構成

を考えたかどうか」と助言。夕暮れの阿武隈川を描きたいと話す生徒には、撮った時の気持ちを尋ねました。「落ち着く」と答える生徒。「美しいものを美しいと感じることが大事。第一印象を表現できたらいいね。他者に伝えられるよう、もう一度現場に行って深めてほしい」と背中を押しました。公園の銀杏並木の写真を見せながら「湿ったところがあったので、その空気感も描きたい」という生徒には、「垂直、水平ではなく歪んだ感じで描くと空気感が出るかもしれない」と。「以前は絵が写真の代わりでした。カメラの出現で写実的に描かなくてもよくなった。その場の空気を描きたいというのは、まさに印象派が考えたこと。印象派の父といえばセザンヌです」。豊かな知識と経験に基づいた齋先生の話に生徒たちはもう夢中です。









技術や画法を精力的に学び、 センスを磨く生徒たち

助言に導かれながら構想を固め、エスキース（下絵）を描き始める生徒たち。昼休みに入る前、エスキースを見ながら再びアドバイスをいただくことに。阿武隈川や銀杏並木を選んだ生徒たちには、「写真や映像の奴隷にならないように。写し取るだけにならないように」と齋先生。家族で温泉に行く途中の風景を描く生徒には、「空と山、中心はどっちか。自分の意思はどの辺にあるか。どうすればそれが他者に伝わるかを考えて」。さらに「円の中に描くことで風景が凝縮される。固定概念が壊れて自由に描けない。それを乗り越えた人が残る」と。今、生徒たちがとても難しいことにチャレンジしていることも教えてくださいました。

午後は、すべて制作の時間とし、絵の具を使い始めた生徒たちに助言を続ける齋先生。花見山と愛犬を描く生徒には、「菜の花が少ないほうが描きやすいと思ったら自分の気持ちに従う」と。「当たり前の構図になりそうだったら、菜の花の右上を開けるとか、遠くに離したり、近づけたり…粗密を考える」など、助言はますます冴えわたります。黄金比やパルルールなどの知識、技術、画法を精力的に学び、センスを磨く生徒たち。短時間で急成長していく様子に、末頼もしい未来を感じたワークショップでした。



福島 / 会津の色、わたしの色 — 私だけの「色手紙」をつくろう —

「色」を通して、地域と未来のわたしのつながりを考え、
「色手紙」として表現しました。

2022.12.3 sat

会津坂下町 会津坂下町立坂下中学校

講師 手塚 千尋

明治学院大学心理学部教育発達学科准教授。兵庫教育大学大学院博士課程修了。博士(学校教育学)。ワークショップによる協働的な学び、学習環境デザインを専門とする。色や形の表現による広義の異文化理解を目的としたワークショップを国内外で展開している。近年は、アートベースドリサーチによるワークショップデザインに取り組んでいる。栃木県生まれ。幼少期に勿来海岸で海水浴を楽しんだことが夏の思い出。



果たしてどんな配色が生まれるでしょう
「地域の色」と「未来の私の色」が出会ったら

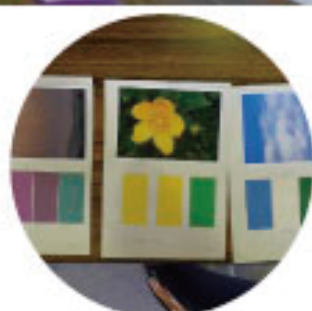
講師の手塚先生は、美術教育が専門です。普段は、どんな環境を準備したら子どもたちがワクワクしながら学ぶことができるかを、研究テーマにしており、グループワーク(協働的創造)に注目しているそうです。いろいろな人とコミュニケーションをとりながら、新しいことを見出していくようなワークショップスタイルを取り入れているとのこと。今回のプログラムも然り。加えて文化部の1年生と2年生22人には事前に、「会津らしさや故郷を感じる物もしくは風景を、少なくとも3つ見つけて写真

を撮ってきてください」という宿題が届いていました。

みんな何が始まるのかワクワク、ドキドキ。早速、4つのグループを作り、用意した写真を手元に置きながら手塚先生のお話に耳を澄ませます。「色は、あなたの思いや考えを伝えるメディアです。地域の色と、未来の私の色が出会った時、どんな配色が生まれるでしょう」と問いかけました。すぐに正解が見えてこない問いにちょっぴり戸惑いながら、ワークショップが始まりました。







色は人によって見え方が異なる 見えない色も見えてくる 十人十色の色選び

生徒たちが用意した写真は、おばあちゃんが育てたバラや近所の庭木、校庭、おじいちゃんの起き上がり小法師、会津木綿、新選組の旗、虹などなど…。写真から好きな色を複数選び、199枚のカラーピースからそれに近い色を見つけて色調査シート（地域の色）に貼っていきます。アドバイスし合いながら色を決める子、写真に忠実な色を探す子、見えない色（写真から想像した色）を選ぶ子、同じ虹の写真から異なる色を選んだことを不思議がり、面白いが仲良し二人組など、色選びはまさに22人22色。地域の色との関係性を考えながら、次は「未来の私の色」を決めていきます。すぐに決まる子、悩み続ける子、様々な個性の子ども達。「なぜその色なのかを考えながら選ぶことが大事です」と手塚先生。

約2時間が経過したところで台紙に「地域の色」と「未来の私の色」を配色し、タイトルを付けて色手紙を完成させました。

どんな作品ができたかグループ内で発表し合った後、みんなでお互いの作品を鑑賞する時間を設けました。「不安定な自分」「優しい心と暗い心」「自分の人生」「カラフル」「向上心」「隙間から見える次の空」など、自分の気持ちを凝縮させたようなタイトルが付けられた色手紙を見て手塚先生は、こう話しました。「不安定な自分をわかっていますね。生徒には、大人の意図を乗り越えて考える力があります」。濃密な時間の中で集中し、互いを高め合った生徒たちの表情は、とても晴れ晴れとしていました。



参加者の感想

・そこにある色だけでは表せない色もあったので、色にはまだまだたくさん種類があるのだと知ることができた。

・同じ赤でも、濃さで印象が全然違って楽しかったです。

・地域の色をまとめて、一つの作品を作ったのが面白かった。

・1枚の写真の中からいろんな色が生まれることがとても面白いと思った。

・みんなの作品を見て1人1人、違う色が見えることを今回のワークショップで知った。

・他の人から見る会津の色などが知れたので良かったです。

・貼った色から組み合わせを決めて、新しい色を作るのは面白かったです。

・いつも見ている風景を、色に出来ているのがすごく楽しかった。

・友達と同じ写真があったけど、選ぶ色が全然違って、人それぞれ選ぶ色が違うんだな～と思いました。

・写真と同じ色を見つけたり、比べてみたり、自分の色を見つけたりなど、とても面白い活動でした。題名を考えたりするのも楽しかったです。



アート＆サイエンス 「人体」をテーマにした STEAM から

STEAM 教育※の技法を用いてを「螺旋」をキーワードに
アートの表現を学びました。

※近年注目されている「STEAM(スティーム)教育」は、科学(Science)・技術(Technology)・工学(Engineering)・アート(Art)・数学(Mathematics)の各領域を横断的に学ぶことを通じ、様々な社会的課題の解決などにつなげる教育のことで、子どもたちの学びを広げ、AI時代を「自らつくっていく力」を育む教育のことを指します。

2022.12.20 tue 福島市 福島県立福島西高等学校
2023. 1.28 sat 福島市 やのめ学童クラブ
2023. 2.12 sun 福島市 福島県立橋高等学校
(会場:とうほう・みんなの文化センター2F展示室)

講 師 渡邊 晃一

福島市在住(北海道出身)。福島大学人間発達文化学類教授。筑波大学大学院修了。身体や大地など幅広いテーマで絵画制作や現代美術の制作を行い、国内外での展覧会等で活躍中。近年ではレオナルド・ダ・ヴィンチの研究でも注目され、テレビ番組の監修も行う。福島ビエンナーレ、風と土の芸術祭など県内の芸術祭を企画監修。震災では「鯉アートのぼり」に取り組み、国内外にふくしまの活動を発信している。近著の『モナ・リザの教科書』(2021)が話題。



螺旋を意識することで作品に 躍動感や生命観が生まれます

「STEAM 教育」を用いた渡邊先生のワークショップの今回のキーワードは、「螺旋」です。ミロのヴィーナスの石膏像や人体模型を用いて、作品をつくる際に必要な視点を、美術解剖学や最先端の映像メディアからも学び、アートの表現へと結びつけていきました。

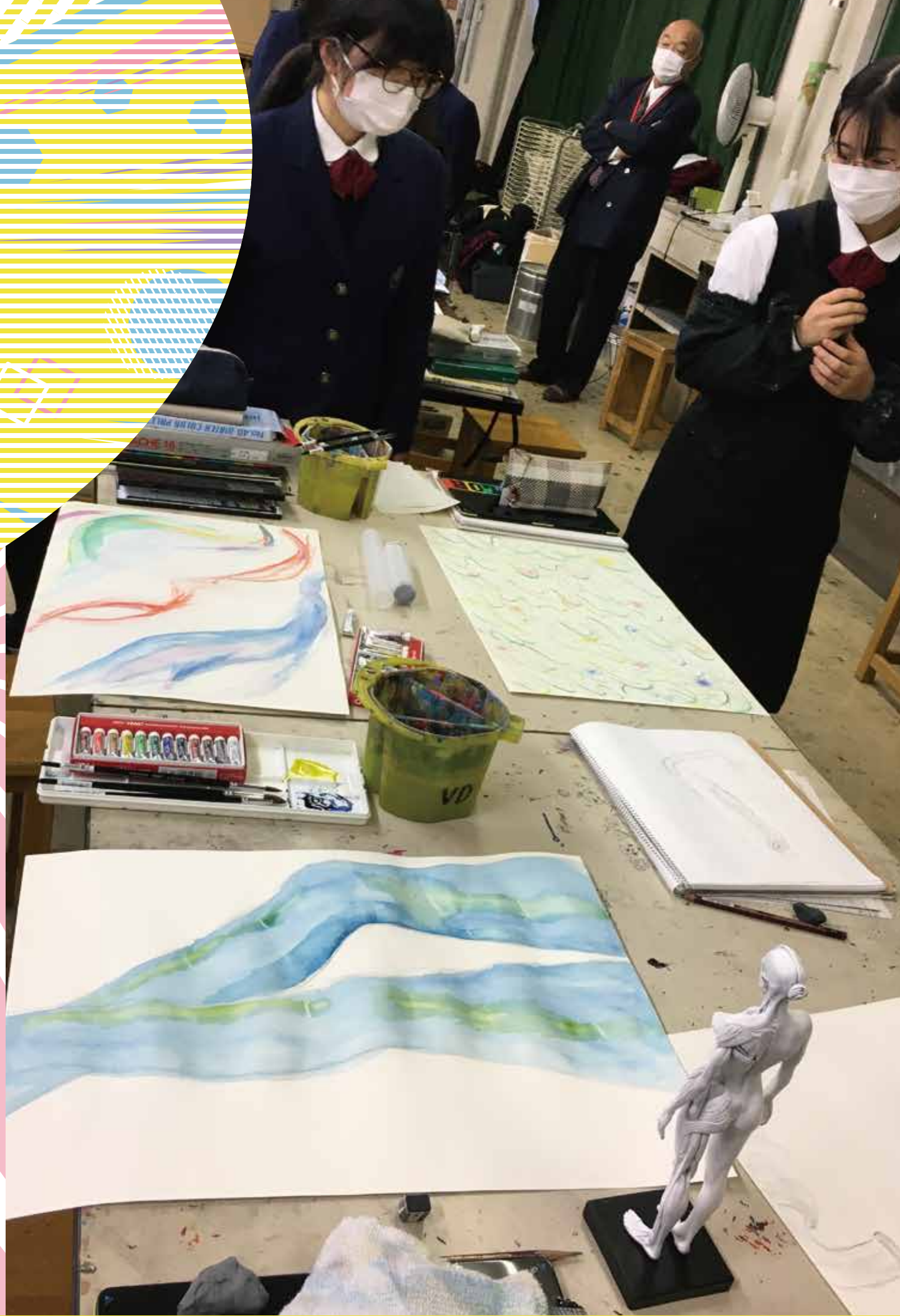
ワークショップの冒頭、渡邊先生は、こう話しました。「人間の体は真っすぐではなく、人が動く時は螺旋の動きをします。彫刻も真上から見ると螺旋的。かっこ良く動いている人の姿は、みんな螺旋。水道から落ちる水も、植物も、メラメラと火が燃え上がる時も螺旋的な動き。この螺旋を意識することで、作品に躍動感や生命観が出てきます」。

福島西高校の生徒たちは、美術室

で白い画用紙にたくさんの螺旋を描くことからスタートしました。「見えない命の螺旋的な動きを意識しただけで絵が変わります」と渡邊先生。刺激を受けた生徒たちが、螺旋の中からアオミドロや馬、へび、トカゲ、巻貝などの形(イメージ)を見つけ出し、作品に仕上げていく様子は、圧巻でした。

橋高校の生徒たちは、針金で手足、発泡スチロールで頭、スポンジで腰、木片で胴体、と人体の骨格を作ることからスタート。続いて粘土で肉付けして人体模型を作りました。「螺旋で回転させた方が美しく見える」と渡邊先生から教わると、真っすぐだった模型の手足や体に少しずつ動きがつきはじめ、躍動感が生まれました。







約2時間、集中し続けた子どもたち 動きや変化を楽しむワークショップ

やのめ学童クラブの小学生は、福島県の鳥(キビタキ)と、2023年の干支であり福島に春を告げる吾妻山の雪型でもあるウサギを粘土で作りました。鳥は、まず小さな球体とそれより少し大きな立方体を粘土で作りました。立方体の一角に球体をつけて鳥の原型とし、そこから口ばしや羽根、尾羽をつまみだします。最後に螺旋を意識して頭や羽根、尾羽をひねり、動きをつけました。ウサギは、アヒルの卵ほどの大きさの楕円の頂点に小さな球体をつけたものが原型です。そこから長い耳や手足をつまみ出し、ひねるなどして動きをつけました。約2時間集中し続けた子どもたちは、作品を3Dスキャンしてモデリング。最新の技術を使ってバーチャル画面に映す体験もしました。

「レオナルド・ダ・ヴィンチは、生命を尊重しないものは生命に値しないと言いました。AIによるデータ化が進むと、同じモノがあふれていきます。だからこそ一人ひとり違ったものの見方を持ち、命と向き合うことが大事になります」と渡邊先生。先生が引用した「人生において大切なことは、人間関係や芸術、または若い頃からの夢かもしれない」というスティーブ・ジョブズの言葉とともに記憶に残るワークショップとなりました。



参加者の感想

- ・これまでになかったたくさんの発見をすることができました。身の周りを探すと水道やヴィーナス像など隠れた螺旋がありワクワクしました。
- ・これから生命的なものを描きたい時は、らせんを意識して描きたいです。

- ・人体にも生命にも螺旋が使われていると知り驚きました。
- ・「らせん」の話を聞いて、人間の構造を知ることによって絵にも影響が出る、ということを知りました。

- ・ミロのヴィーナスの体のねじれや重心が思っていたよりも深く、とても驚きました。デッサンをする時はぜひ意識して臨みたいです。
- ・一見関係のなさそうな分野にも実は美術的要素があることに気付いて驚きました。

- ・人体も炎も水も、全てのものに螺旋が隠れていると聞いてとても驚きました。そして、実際に描いてみたときにそれを実感しました。
- ・人体から美術を考えるのが面白かった。

- ・人体について知れてとても面白かった。私も将来、解剖学について学んでみたい。
- ・教わった骨や筋肉のつき方を意識して紙粘土を貼る作業はとても頭を使い、集中して楽しむことができました。

- ・S TEAM 教育という言葉自体、初めて聞いたのでとてもためになった。
- ・実際に人体模型をつくることで、人体の構造が理解できて面白かった。

4

簡単・たのしいトリック写真

身近ものをちょっと工夫しておもしろいアート作品づくり
タブレットなど身近な情報機器で工夫しながら撮影し、
まるで自分たちが小さくなったり、飛んだりしているかのように見える
不思議な映像を作りました。

2022.12.17 sat

会津若松市 会津若松市立第二中学校

講師 高橋 延昌

会津若松市在住(宮城県出身)。会津大学短期大学部産業情報学科教授。筑波大学大学院修了。グラフィックデザイン、デザイン教育、基礎造形が専門。広告、出版、印刷、パッケージ、PRデザイン、CGによる教育研究(小学校から高校まで)を行なっている。地域ブランドや地域活性化の産学連携にも取り組み、奥会津地方・只見線沿線の活性化デザイン、自治体のイメージキャラクターやロゴデザインも多数。





高橋先生が講師を務めたワークショップ会場、会津若松市立第二中学校は、鶴ヶ城に近いことから校舎の屋根は瓦風、外壁は白にするなど歴史と景観に配慮したデザインになっています。校舎内には、天窓や吹き抜けの多目的ホールもある素敵な学校です。

美術部の生徒7人がチャレンジしたワークショップに、高橋先生は「デジタルによるメディア表現の可能性を身近に感じてほしい」という願いを込めました。「デジタルカメラの設定

によって、まるでミニチュアが動いているような作品をつくることができます」と高橋先生は話します。被写体や動きを考えて、コマ送りのように撮影し、それを逆再生することで、ミニチュアアート動画のような作品を作ることができるのです。そんなことほんとにできるの?…説明だけでは、なかなか想像できない生徒たち。早速、2班に分かれ学校内で撮影してみることにになりました。

デジタルによるメディア表現の可能性をもっともっと身近に感じてほしい





飲み込みの早い生徒たち
新たな手法で地域の魅力を表現
果敢に情報発信

始める前に高橋先生は、撮影する際のコツを「斜め上から撮ってください」と伝えました。「それとピントが合っているところとずれているところ。ぼかし部分があることでミニチュアのように見えます」とも。まずはウォーミングアップ。体育館で卓球やバドミントンを楽しむ風景を、ミニチュアのように見えるテクニックを使って撮影しました。なかなかいい感じです。

勢いにのってきたところで次のワーク。撮影した写真素材をパソコンでつなぎ合わせて逆再生し、ミニチュアアートのような動画作品をつくります。まずは素材の撮影。撮影者と出演者に分かれ、カメラを定点で固定し、出演者を少しずつ動かして何枚も撮影していきますが、ポイントは、「逆再生することを考えて

構想を練ること」。

驚くべきは、生徒たちの飲み込みの早さです。短時間で撮影と編集をこなし、「若松二中の人文字」「若松二中美術部 PR ビデオ」「マグロベルトコンベア」と計3本も動画を作り上げてしまいました。特に人間をマグロに見立てた「マグロベルトコンベア」では、学校のシンボルで多目的ホールの2階部分にある木造の「飛翔橋」まで活用し、コンベア上をマグロが流れて行く様子を何枚も何枚も撮りました。カメラマンも、ゴロゴロするマグロ役の生徒も頑張りました。美術部 PV は、「2023 年度の部活紹介にします」とのこと。今回覚えたテクニックを使って、新入部員も含めみんなで鶴ヶ城や自分たちの学校の魅力を発信してくれることを期待します。



参加者の感想

- ・ コマ撮りは思っていたよりは難しくなかったし楽しかったです。
- ・ 撮影のコマ撮りでカメラマンと出演者どちらもやって大変だったけど面白かったです！

- ・ ここまで体を張ってやる作品は初めてなので、とても楽しかったです。映像を見ると自分たちが人形になったみたいで面白かったです。これを活かした感じで写真をこれから撮っていきたい。

- ・ 最初は、なかなか想像がつかないことだったけど、結論としてはマグロが出荷された映像になったので「何これ ww」と思う。

- ・ 平行移動と回転移動だと、自然なのは平行移動だったので、階段でのシーンは皆ツボに入りました。
- ・ 写真で動画の様なものが作れて面白いし、機会があったらまたやりたかったです。

- ・ マグロの出荷の写真（人がゴロゴロしている所）がとても面白かった。
- ・ こんな短時間でこんなミニチュアみたいなのが出来るんだと思いました。

- ・ カメラで簡単に、小人が動いているようになって、面白かった。またいろんなことに使ってみてほしい。



アートによる新生ふくしま交流事業

「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」「アートで広げるみんなの元気プロジェクト」

みんなのアート作品展

県内外で活躍する9名の講師とともに創り上げたワークショップ参加者の作品を展示しました。



会場のアンケートから

色々な表現があるものだなと感動しました。彩り豊かで自由な発想...とても良かったです。

自分でも気づいていないかもしれない思いを形にして表現するって、素晴らしいと思いました。

各ワークショップの取り組みがコンパクトに紹介されていて、良かった。

見ているだけで楽しい気持ちになり、機会があったらやってみたいと思いました。

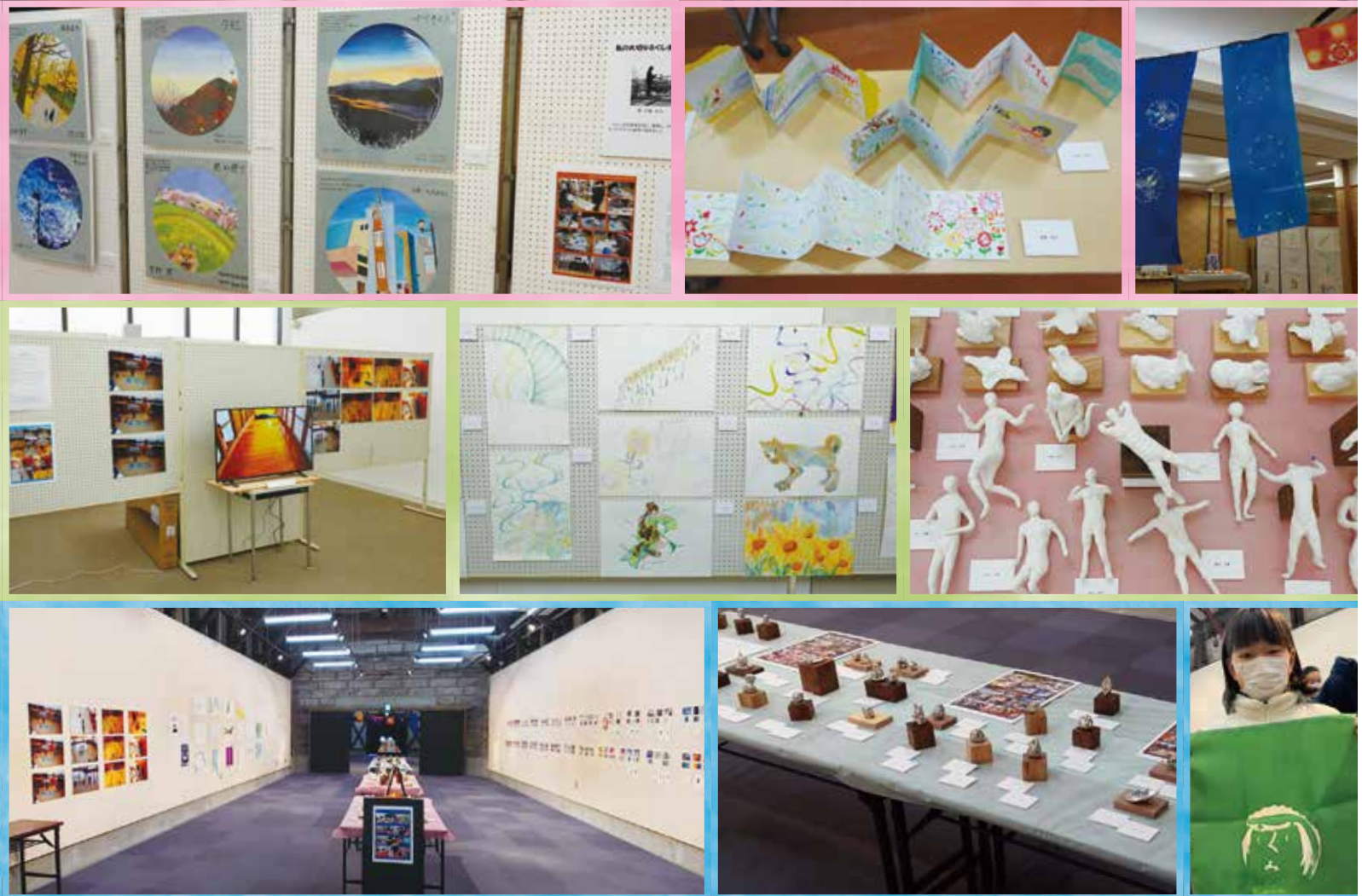
これを見て、知らなかった世界が有るのだと思った。

手作り・物づくり、世界に一つしかない物の良さを改めて感じました。

2023年 2月 4日(土) ~ 2月12日(日) 会場：パセナカ・ミッセ 地域交流スペース(福島市)

2023年 2月15日(水) ~ 2月21日(火) 会場：郡山女子大学建学記念講堂展示ロビー(郡山市)

2023年 2月23日(木) ~ 2月28日(火) 会場：野馬追通り銘醸館(南相馬市)



皆さんの作品を見ていて
心動かされ、
元気になりました。

それぞれ個性的で、
その方の気持ちを
感じ取ることが出来、
大変良かったです。

自分の思ったように、
形にとらわれず表現する
素晴らしさに感動しました。

すべての作品に
手づくりの
温もりが感じられ、
特に絵本はとっても
良かったです。

本当に様々な表現方法、
作品があって、
見ていて飽きが来ません!!

小さい頃から
大人になっても、
こういった表現する
場所があるって良いですね。

振り返りと気づき



豊かな感性を認め合い、新たな価値を創造する力を育んでもらいたい

今年度も小学生から高校生まで、多くの子ども達にワークショップに参加していただきました。子ども達は最初、戸惑って悩めますが、しばらくすると勝手に手が動き始め、どんどん作品が出来ていきます。中には、最初から戸惑いもせず手を動かす子どももいて、はっと目を引くような作品が出来上がります。その発想力、感性の豊かさに驚かされます。

そして、子ども達一人一人にそれぞれ違った個性があると気づかされるのです。

東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所事故により、これからの日本が抱える様々な問題を先取りすると言われている福島県。これからの時代は、多様な考え方や生き方を認め合うことが大事になります。

アートには、創作や鑑賞の機会を通じて、他者との共通点や相違点を知るきっかけとなり、自己理解や他者理解を深める力があります。

これからの時代を生きる子ども達にこそ、アートを通じて互いの豊かな感性を認め合い、新たな価値を創造する力を育んでもらいたいと思うのです。

(認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島 事務局 菅野 真)

子どもたちの記憶に一生残るワークショップ

やのめ学童クラブは、未来プロジェクトのワークショップに3年連続で参加しています。子どもの中には、昨年と今年と続けて参加している子どももいます。

渡邊先生のお話は、何かを表現しようとする際、「自由に作ってください」というのではなくて、人や動物が歩く時の仕組みなどを無理なく、分かりやすく教えてくださるので、私自身もとても勉強になります。子どもも大人も一緒に学べる場所がいいなあと思います。

以前、幼児教育に関わっていたので、「自由に」というのは投げ出していることと同じでは…という思いが私の中にあります。やはり一つのことに長けている方は、そういうことをよく分かっておられるんですね。

今回のワークショップも興味深いものでした。粘土で作った球と立方体をくっつけてキビタキにするとか、卵型からウサギを作ってしまうとか…今までにないものの見方や考え方は、子どもたちの記憶に一生残ると思います。そして、様々な形で関わって、子どもたちの人生を豊かにすると思います。

(2022年度開催のワークショップ会場にて。福島市在住 河戸廣美さん談)

アートによる新生ふくしま交流事業「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」2022

制作・編集 認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

デザイン 有限会社デザインングマーブル

主 催 福島県

事業受託者 認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

【お問合せ】

認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

福島県福島市三河北町2-8 Coco Mezon1階B室

TEL 024-563-1955 FAX 024-563-1955 E-mail info@f-jdi.com



主催：福島県

事業受託者：認定特定非営利活動法人 ドリームサポート福島

◆この事業は、国内外からお寄せいただいた寄附金をもとに造成された
「福島県東日本大震災子ども支援基金」により実施しています。